



# 2分30秒にかけた チアリーディングへの熱い思い

会員 鈴木 悟子 (69期)

突然だが、チアリーディングという団体競技があることをご存じだろうか。最近では、テレビの特集などで少しずつ取り上げられるようにはなったが、まだ認知度は低いのではないだろうか。今回は、私が大学時代に打ち込んだ、チアリーディングについて少しご紹介したいと思う。

チアリーディングは、アメリカンフットボールや野球などの応援活動から始まった。その後、スタンドの観客を楽しませるためにアクロバティックな立体感のある技が取り入れられるようになり、1980年ごろ、アメリカ合衆国で初のチアリーダーが主体となる競技会が開催され、日本でも1988年に第1回全日本チアリーディング選手権大会が開催され（日本チアリーディング協会のウェブサイト (<https://www.fjca.jp/>)）、その後、主に毎年春・夏・冬に全国大会が開催されている。

大会での各チームの演技時間は2分30秒、主に8名以上16名以内で編成される。競技規則として、演技に取り入れるべき要素がいくつかあるのであるが、その中心となるのが「パートナースタunts」と「ピラミッド」だ。

パートナースタunts（以下「スタunts」という）は、組体操のようなものだ。このスタuntsは、上に乗る「トップ」、トップを下から支える「ベース」、スタuntsの後方において司令塔の役割を果たす「スポット」の三役を中心に構成される。私はベースだった。

スタuntsの種類は様々だ。いくつか基本的なものをご紹介すると、2名のベースが、トップを肩の高さまで持ち上げる「エレベーター」、ベースが、肩の高さまで上げた腕をさらに上方へと真っすぐ伸ばし、その掌の上にトップが立つ「エクステンション」、さらにそこでトップが片足となる「リパティ」、ベース2名が腕を十字に組み、そこにトップを乗せ、三役全員のタイミングを合わせて一気にトップを上方へ飛ばし、空中でトップが宙返りを

する通称「バックフリップ」等である。

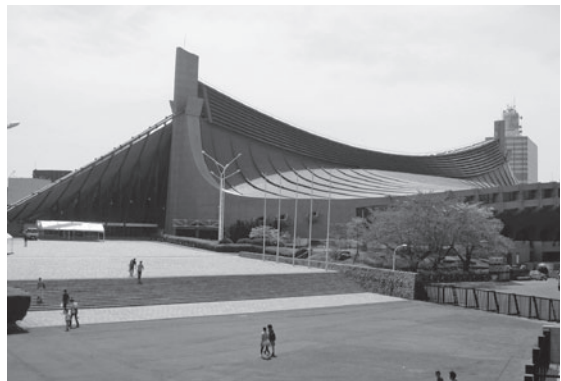
ピラミッドとは、スタuntsを組み合わせたものであり、大会ではこのピラミッドの難易度と成功率がチームの順位を左右する。ピラミッドも数多くの種類がある。例えば、3名のベースの上に、3名のミドルトップが乗り、その腕に2名のトップが飛び乗る通称「3・3・2」など。どれも高さは約4メートル以上の立体感あるものだ。

各チームは、その実力に応じた難易度のスタuntsやピラミッドを取り入れて演技を構成し、大会に臨む。スタuntsもピラミッドも、チーム全員の息がピッタリと合い、全員が体力・持久力を有していなければ成功しない。

大会本番まで何百回と練習を積むが、大会直前までピラミッドが何度となく総崩れの失敗を繰り返し、涙を吞んでピラミッドの難易度を下げたこともあった。

トップは、ピラミッドの頂上へ飛び立つ際、ベースが下で必ずキャッチしてくれると信頼し、自らの身体・生命を下に委ねる。ベースは、トップのその信頼に応えるため、身体と精神力を鍛え、どのような角度からトップが落ちてこようとも、必ず下でトップをキャッチし、守り支える。私は、この信頼関係こそがチアリーディングの肝だと思っている。

弁護士となった初めての夏、元気をもらうため、久しぶりに全国大会に足を運んでみようと思う。



大会会場近くの風景